中国文化賞を受賞して

中国新聞社の第51回中国文化賞を，本学からは元理学部の田中隆荘名誉教授，元工学部の門田博知名誉教授及び元教育学部の片岡徳雄名誉教授が受賞した。

三氏の受賞理由は，去る11月３日付けの中国新聞に「田中隆荘氏，バイオ増殖法開発－安易な妥協拒み研究一筋」，「門田博知氏，広島交通網に指針－多様な意見の調和図る」，「片岡徳雄氏，子供の主体性優先－戦後教育の流れ変える」と報道されているが，今回，長年の研究生活を振り返りながら，受賞にあたってのメッセージをいただいた。

一株の天然生突然変異体から
―研究論理にこだわりをもって―

名誉教授　田中隆荘

はじめに

このたび中国文化賞について広島大学には大変お世話になりました。この受賞は、細胞の機能に対応した染色体の形態的現象の研究と、その形態的現象が種分化及び系統形成の各現象と相関しているという所論、及びこれら研究途上で見出した学術的に重要な遺伝子及び染色体の保存と有用化を行ったことなどに対してである。いずれも広島大学在籍時代に行ったものである。

全身に身ぶるいが走った発見が研究の一つのきっかけ

この研究には一つのきっかけがある。恩師下斗米直昌先生からいただいた題目のもとで卒論研究途上、偶然に一株の天然生突然変異体を見つけた。この突然変異については卒業論文の副論文で済んだが、以後私は天然生変異体を見つけることに熱中していった。その二年後の晩秋のある日、徳島県の那賀川で本来では川岸の砂岩の岩盤上に自生するナカガワノギクが、川畔の田畑の畦や石垣、山麓傾斜地に、変異体を多数含んで群生しているのを見つけた。それを見つけたとき私の全身に身ぶるいが走ったのを覚えている。種分化の原理がこの中に秘められていると直感したのである。

すぐに前夜泊まった鷲敷の宿にとって返し、もう一晩泊まることにしてその個体群を詳細に観察した。その晩、想定した遺伝学的機構を一気に理論に組み立て、それに基づく計算を行い、百万余の変異体が生ずるという論文を素原稿にまとめた。

帰納法と演繹（えんえき）法

研究では研究論理を意識することに努めてきた。その研究論理は帰納法をまず第一としている。しかし、これは下斗米先生の薫陶の賜物である。上記のナカガワノギクの変異体個体群発見の話に戻るが、大学に帰り、鷲敷の宿で書いた素原稿を下斗米先生に見せたところ、「君、これは論文になる。しかし演繹法によっている」「これじゃ前途は伸びない。学問をやるには、まず帰納法を習得しなさい」と。厳しい観察と測定に五年間を要した。私にとって〝啐啄の機（そったくのき）〟の指導となったのである。出来上がった論文は一流の国際誌に採用され、学位論文の一部になった。

私の論文の大多数は帰納法によっている。事や物、理法や体系の論文である。しかし、演繹法による論文も時にある。その多くは技術開発である。染色体軟固定解離法、染色体の機能に対応する新核型論、及びその展開論、ランの遠縁雑種作出法等である。演繹法による研究では、推理して合理的に結果を求めたことが多いが、稀には〝直感的〟に解決したこともある。ランの生殖細胞の形成過程の解明、軟固定染色体の形態的表現、天然生突然変異体の探索等がそれである。さらに、通常の状態では隠れ潜んでいる機能を無理やり目覚めさせる、いわゆる暴き出し法も用いた。

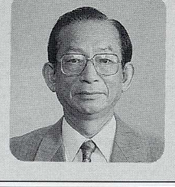
新増殖体苗条原基の発見はそれによった。研究が行き詰まってギリギリのところで直感した思いつきを試してみるとき、良き協力者を持っていることが有り難かった。

受賞による喜び

未知と研究論理へのこだわりと、極限状態で気力と集中力で没入しつづける一人の研究者・教育者にとって広島大学は恵まれた場であった。この受賞による私の大きな喜びは、研究論理を基調とするやり方を支えてくれた人たち、それを一緒にやってきた人たちのやっていることが、評価を受けることになったことである。このやり方を理解し評価する人があってのことであり、心からお礼を申しあげる。最後に、広島大学のますますのご発展を大慶の至りに存ずる。（たなか・りゅうそう）

一歩一歩と豊かな交通を目指して
―共生の理念―

名誉教授　門田博知



はじめに

このたびの中国文化賞の受賞は、恩師や諸先輩をはじめ多くの方々からいただいたご指導、ご援助、ご協力のお陰と深く感謝しております。また、数多くの地元の方々のご意見やご要望をつぶさに伺う機会に恵まれたことも、大いに関係していると考えております。

都市づくりや地域づくりと連動した交通計画にかかわって

交通との関わりは、昭和二十八年広島大学を卒業して広島県の都市計画課（現在の都市計画課）に在職中、イギリス・ロンドンのバスターミナルに関する文献を調べる機会を与えられたことに始まっています。当時はバスターミナルの計画はどこから手をつけてよいのか、随分困ったことを記憶しております。

都市づくりや地域づくりと連動した交通計画にかかわって約三十年がたちました。広島都市圏や中国地方の成長とともに歩んできたようにも思います。

都市や地方の発展計画と同じように、交通施設の計画でも、二十年、三十年先の都市や地方の将来像を念頭に置きながら計画を立案していくケースがほとんどです。新幹線も、構想は昭和十八年に出されていますし、中国縦貫道、本四架橋も、構想から実現には二十年以上の時間がかかっています。都市再開発や区画整理も少し規模が大きくなると同じようです。とくに都市計画では、完成した時点から二十年、三十年と陳腐化しないことが大切です。

これまでは、成長路線一筋に進んできた都市が多く、過去からの傾向や先進的な都市や地方も参考にすることができましたが、これからは大変です。計画の影響を受けられる地元の方々は、二十年も先の都市像を描くことも、先進都市の姿を見ても、現在とは大きく違うため不安がられることもあって、計画案が地元で承認されるのに多くの日数を必要とすることになるでしょう。これも自然なことと思っています。

交通施設の整備計画も、行政、地元住民、利用者、さらには財源調達の関係機関まで、それぞれの希望を最大限生かせるような議論や検討の場をもつことが大切で、お互いの信頼関係が確立されると、相手の立場を相互に理解しあって、共生の理念のもとに本音で明るい討議ができますし、計画案の策定も進んできました。

これからは、文化的にも厚みのある国づくりが必要

これまでの戦後五十年間は、経済成長優先型の計画が主要な部分を占めていましたが、これからの五十年は、文化的にも厚みのある国づくりが必要だと思います。国土の均衡ある発展を、もう一度抜本的に考える時期に来ています。ハードも必要ですが、それにもましてソフトの開発が必要だと考えているこの頃です。

これからも少しでもお役に立てればと考えておりますので、今後ともご示唆やご意見を賜りますようお願いします。

おわりに、広島大学のますますのご発展を祈念して筆をおきます。

（もんでん・ひろかず）

多義性のもつつらさと楽しさ

名誉教授　片岡徳雄

このたびはからずも、第五十一回中国文化賞受賞の栄誉に浴しました。この喜びをなによりも分かち合いたいのは、長く私と研究を共にしてまいりました、広島大学教育学部教育社会学研究室関係のかたがたであります。

イデオロギーから効用性まで

教育社会学という学問は、戦後、日本の教育学の一領域として生まれた若い学問で、その社会的問題意識とその科学的実証性において、おおいに期待がかけられたものです。私などもそこに魅せられてこの道に入りましたが、しかしなかなか思うようには進みませんでした。

一般に教育学研究はすべてそうなのでしょうが、とりわけ教育社会学には、どんなテーマをどんな方法でやるにしても、いわばヌエのような多義性がつきまといます。「お前の立場は、どんな思想やイデオロギーのものなのか」「実証するにしても、どんな方法を使うというのか」「明らかにしたというが、それでどんな効用があるというのか」など。「学問の十字路」に立つ教育社会学は、まことに「学問の十字砲火」を浴びる運命にもあるわけです。

今回の受賞もそうでして、「人間関係から実証的にとらえる独自の視点が、戦後の教育を個性尊重の教育に変えた」という評価をいただきましたが、それは過分のお言葉。と言いますのは、ここでいう「個性尊重」のいっそうの哲学的究明、「実証的にとらえる」方法のいっそうの科学性、さらには「変えた」方向にいっそう進む効果的方法、などにつきましてはまだまだ不十分で、私ならびに共同研究者たちが、さらにチャレンジすべき問題と考えるからです。

自分なりにこだわる小テーマから

若い頃にこんな話を聞きました。「学問研究への入り口は、本流がよいか、支流がよいか。どちらともいえない。どんな対象でもよい、コツコツやっているうちに、それにからんで、葉っぱ、小枝、大枝、さらには幹や根が、自分なりに見えてくる」。私には、その「自分なりに」という言葉が、強く心に残りました。

考えてみますに、私は若い頃、「教師中心の一斉授業のもつ問題」という小さな入り口から出発し、中年に至って、「権力主義的な集団主義教育」という大問題に突き当たり、それを通り抜けた地点で、「日本人の個性や主体性の弱さ」という深いテーマを痛感するようになりました。

このような歩みが幸せだったかどうか。このようなテーマが、日本の教育学にとって意味を持つかどうか。ただ少しく言えることは、私が「自分なりに」こだわってきたテーマが次々に新しいテーマを呼ぶからくり―学問研究の醍醐味（だいごみ）―を少しは体験したことでしょうか。

これから進まれる、若い優れた研究者のかたがたも、どうかこのような楽しさを楽しまれつつ、独自のご研究を推進されるよう念願する次第です。

（かたおか・とくお）